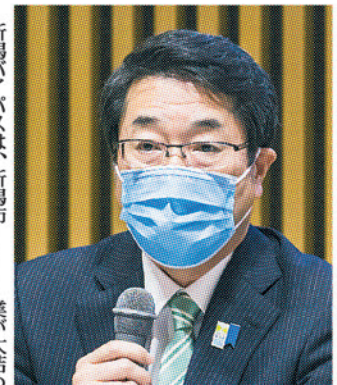


魅力あるまち 共に築く



なかはら・やいち 1959年、新潟市出身。明治大政治経済学部卒。95年から県議4期、2010年から参院議員1期をそれぞれ務めた後、18年10月、新潟市長に初当選した。現在1期目。

新潟バイパスが整備された一番の恩恵は経済の活性化だ。当時、新潟商工会議所では、開通を見越して地域の御業者に声を掛け、竹尾インターチェンジ（IC）脇で御用地の開発を進めた。1973年に完工し、参加団屋の販売額は一挙に3倍まで伸びた。

また、建設業界の一人として道路の保守、維持管理は重要な使命だと感じている。今シーズンは大雪だったが、昨シーズンはあまり降らなかった。気候変動の影響は大きい。業界としては、いさという時にすぐ動ける体制を整えておかなければならない。



さの・かずし 1963年、徳島県出身。東京大大学院修了。専門は土木計画学、交通工学。アジア工科大学大教授などを経て2015年4月から現職。

岡技術科学大学の佐野可寸志教授、新潟日報社の大塚清一郎・論説編集委員（コーディネーター）、国土交通省新潟国道事務所の祢津知広所長が出演。会場の関係者を含め約200人が視聴し、新新、新潟西の両バイパスを含めた未来のまちづくりについて考えた。

新潟バイパス開通50周年 記念座談会

新潟バイパスは、新潟市民をはじめ、新潟圏の人々に欠かすことのできない重要な道路だ。開通によって市の拠点性が向上し、新たな人の流れや物流を生み出したほか、まちに活力を与え、発展の土台を築いた。

新型コロナウイルス感染症により、大都市圏で人口集中のリスクが顕在化した。困も「東京一極集中型から多核連携型の国づくりへ見直す」と、大きな方向転換を示している。テレワークなど新しい働き方は場所を選ばず働けるため、地方移住を前向きに検討する人が増えている。

市街地と田園地帯が共存する新潟市は、豊かな食や自然に恵まれ、就労環境や住環境も整っている。バイパスや高速道路、新幹線といった陸路に加え、空路や航路などの交通アクセスも充実。地方への関心が高まっている今こそ、新潟の魅力や優位性を積極的にPRし、「選ばれる新潟」を目指して取り組みたい。

活力を生む仕掛け大切

業が大詰めを迎えている。2021年度に在来線の高架化が完了。22年度に駅直下のバスターミナル、23年度に新たな万代広場が完成し、南北市街地の一体化が実現する。国の事業「バスタ新潟」や民間の動きとも連携を図ってきたい。

また、「新潟の顔」ともいえる新潟駅が古町までの都心軸約2キロの呼称を「にいがた2km（にいがたにぎろ）」とした。この区間を背骨にした上、緑があふれ、人や物、情報が行き交う活力ある都心エリアづくりを官民が連携し、進めていきたい。

企業進出促し経済発展

また、建設業界の一人として道路の保守、維持管理は重要な使命だと感じている。今シーズンは大雪だったが、昨シーズンはあまり降らなかった。気候変動の影響は大きい。業界としては、いさという時にすぐ動ける体制を整えておかなければならない。

新潟西、新新を含め新潟バイパスの交通量（日中12時間、2015年度調査）は全国の一般国道トップレベルのうち3区間が入っている。トップとの差は17台だ。信号交差点をなくすことで、通行可能な交通量を増やし、事故の発生率を抑えている。最高速度も新潟バイパスは時速70キロ、新潟西バイパスは時速80キロと全国に先駆けて引き上げた。速達性、安全性と併せて道路の重要な機能を持つている。

渋滞解消でより安全に

渋滞を解消し、安全性を高める方法は、①女池ICの本線6車線化②並行する高速道路の料金値下げし、交通量をシフトさせる③料金値下げの社会実験では、減収にならない割引率も示されており、さらなる精査が必要である。新潟バイパスの機能を強化した場合には、紫竹山ICからの流入車両が増える予想される。このため、栗ノ木バイパスや市街地につながる道路の整備が不可欠だ。



ふくだ・かつゆき 1955年、新潟市出身。東京大経済学部卒。新潟市出身。東京大経済学部卒。90年に福田道路に入社。2009年3月から福田組会長。13年11月から現職。現在3期目。日本商工会議所副会頭などを兼務。

また、建設業界の一人として道路の保守、維持管理は重要な使命だと感じている。今シーズンは大雪だったが、昨シーズンはあまり降らなかった。気候変動の影響は大きい。業界としては、いさという時にすぐ動ける体制を整えておかなければならない。

また、建設業界の一人として道路の保守、維持管理は重要な使命だと感じている。今シーズンは大雪だったが、昨シーズンはあまり降らなかった。気候変動の影響は大きい。業界としては、いさという時にすぐ動ける体制を整えておかなければならない。



新潟バイパスの役割や将来像について産官学の関係者が語り合った記念座談会＝13日、新潟市中央区

夜間も巡回 通行支える

新潟国道事務所 祢津知広所長



ねづ・ともひろ 1979年、東京都出身。東北大学院修了。2005年に国土交通省に入省、道路局高速道路課企画専門官などを歴任。20年7月から現職。

新潟西、新新を含め新潟バイパスの交通量（日中12時間、2015年度調査）は全国の一般国道トップレベルのうち3区間が入っている。トップとの差は17台だ。信号交差点をなくすことで、通行可能な交通量を増やし、事故の発生率を抑えている。最高速度も新潟バイパスは時速70キロ、新潟西バイパスは時速80キロと全国に先駆けて引き上げた。速達性、安全性と併せて道路の重要な機能を持つている。

また、建設業界の一人として道路の保守、維持管理は重要な使命だと感じている。今シーズンは大雪だったが、昨シーズンはあまり降らなかった。気候変動の影響は大きい。業界としては、いさという時にすぐ動ける体制を整えておかなければならない。